

直前一橋大世界史総合演習

【3 回目】



添削課題

【1】

解答

イギリスにおける産業革命の進展は、国内で自由貿易を望む声を高めた。この自由貿易を東アジアに広める過程で、清とアヘン戦争・アロー戦争を戦った。イギリスの砲艦外交は各国が模倣し、ナポレオン3世による仏越戦争でヴェトナムも自由貿易体制に組み込まれた。植民地化が進むインドでは、シパーヒーの反乱が起こるが鎮圧され、イギリスの直接統治が始まった。ロシアは、イギリスのインド支配を脅かすことにつながる南下政策を進めていたが、クリミア戦争でイギリスの支援するオスマン帝国に敗れた。クリミア戦争に参加して国際的地位を高めたサルデーニャは、オーストリアと戦ってイタリア統一を進めた。また、ドイツでも、プロシセンがオーストリアやフランスとの戦争を経て統一を果たした。さらに、合衆国では、イギリスの綿織物業へ原料を供給していた南部が、イギリス産業に対抗しようとする北部と南北戦争を戦って敗れ、北部主導で国内が統合された。(399字)

解説

2009年度に一橋大学で出題された「18世紀なかばに生じた『グローバルな紛争』について」論じさせる問題の、19世紀バージョンである。このような情報整理型の問題は一見すると難易度は高いようには思われぬが、いざしっかりとまとめるとなると相当な地力がないと難しい。とくに指定語句がない場合（一橋大世界史受験者で指定語句を頼りにしている人はまずいないだろうが）、どこから取っ掛かりをつけてよいかわからず、いたずらに時間が過ぎていくケースや、全体像を見渡すことをせず目先のストーリーを追っていった挙句に、最後は読み手に何を書いているのだろうかという印象を持たせてしまうケースが多いように思われる。

この問題でも問われている時代の戦争をまず列記してから、そこからこれらの事象をつなぐストーリーを組み立てるといった手順ができていないと情報に漏れが生じてしまう。解答例では仏越戦争に関するところが一番難しい。この手の展開のさせ方はまず無理なので盗んでおくこと。それ以外は、クリミア戦争からの展開は知っていたかどうかが分かれ目になる。教科書にはこのことが記載されているものもあるので、先の仏越戦争がらみのことよりも難しくはない。

【配点の目安】（配点 50点）

- ①イギリスにおける産業革命の進展は、国内で自由貿易を望む声を高めた（7点）
- ②イギリスは、清とアヘン戦争・アロー戦争を戦った（8点）
- ③ナポレオン3世による仏越戦争でヴェトナムが自由貿易体制に組み込まれた（6点）
- ④植民地化が進むインドでは、シパーヒーの反乱が起こるが鎮圧された（8点）
- ⑤南下政策を進めるロシアは、クリミア戦争で（イギリスの支援するオスマン帝国に）敗れた（6点）
- ⑥イタリアとドイツで統一戦争が戦われた（6点）
- ⑦合衆国では南北戦争が起こり、国内が統合された（6点）

⑧解答を充実させるために、次のうち1つ以上の要素を押さえる。(3点)

- ・イギリスの砲艦外交は各国が模倣した
- ・イギリスは、シバーヒーの反乱を鎮圧して、インドの直接統治を始めた
- ・サルデーニャはクリミア戦争に参加して国際的地位を高めた
- ・サルデーニャはオーストリアと戦ってイタリア統一を進めた
- ・プロイセンがオーストリアやフランスとの戦争を経て統一を果たした
- ・合衆国の南部はイギリスの綿織物業へ原料を供給しており、北部はイギリス産業に対抗しようとしていた

【2】

解答

- (1) 日清戦争後の中国分割でドイツは山東省を勢力範囲に置き、宣教師殺害事件を機に膠州湾を租借した。列強による鉄道建設や教会建設が進む中、山東省を拠点とする白蓮教系宗教結社の義和団が民衆と結んで排外運動を始めた。これに清朝も同調し、列強に宣戦布告したが、8カ国連合軍によって鎮圧された。清朝は北京議定書で外国軍隊の北京駐兵を認め、巨額の賠償金を負わされた。(174字)
- (2) 日清戦争後の三国干渉の代償として東清鉄道の敷設権を獲得したロシアは、旅順・大連を租借し、そこへ東清鉄道の支線を伸ばし、南満州支線を建設した。(70字)
- (3) 二十一カ条要求。以後、中国では反日感情が高まった。第一次世界大戦後のパリ講和会議で、中国はこの要求の撤回を主張したが認められず、五・四運動が勃発した。この要求以後、合衆国は日本の露骨な大陸進出に対して警戒心を強め、ワシントン会議が開かれた。この結果、要求は破棄され、日本の中国進出は抑制された。(147字)

解説

史料は、1915年に日本が中国に提出した二十一カ条要求の一部である。どこで判断するかというとはやはり第一号の第一条であろう。もちろん独逸がドイツと読めるかどうかであるが。

- (1) 義和団事件のことを書けばよい。それに気づかなければどうしようもない。義和団事件については1989年度と2002年度に出題がされている。

8カ国連合軍が鎮圧する話は日英同盟、日露戦争へとつながるストーリーになるので覚えている人も多いと思うが、いったい義和団は何に反発していたのか、義和団の活動はいつ義和団事件になったのか、といった点は、教科書に載っているにもかかわらず曖昧になっている人が多い。この問題では、北京議定書まで書かなければならないのだから、「8カ国連合軍の出兵によって鎮圧された」くらいにシンプルにした方がよい。

- (2) これも1996年度に出題されていたものとはほぼ同じ問題である。東清鉄道について説明すればよいので、こういうところで点数を落とすわけにはいかない。
- (3) 2008年度の第2問で、20世紀前半の日米対立の話をわずか150字で書かせようとする無茶な問題があった。せめて400字ならばワシントン会議についてもしっかりと学習する機会になるのに……と教える側としては残念である。

日本が合衆国との協調を望んでいた、という前提を忘れては、ワシントン会議の内容が理解できなくなる。二十一カ条要求以降に顕在化する日米対立は、このワシントン会議で一応

の妥結を見た。以後、わずか10年にも満たないが、日米関係は協調の側面が強く現れる時代となる。

ワシントン会議で理解が難しいのは中国をめぐる九カ国条約である。九カ国条約によって山東省の利権は中国へ返還されることになるが、これをもって中国の置かれている立場が向上したとはいえない。半植民地状況に変わりはないのだから。したがって、日本と中国との関係もさして良好なものになるわけではない。だからこそ、以後、中国ナショナリズムが高揚するのである（1924年の国共合作以降の動きを思い出すこと）。

【配点の目安】（配点 50点）

(1) (25点)

- ①日清戦争後の中国分割でドイツは山東省を勢力範囲に置き、宣教師殺害事件を機に膠州湾を租借した（6点）
- ②列強が進出する中、白蓮教系宗教結社の義和団が民衆と結んで排外運動を始めた（5点）
- ③清朝が列強に宣戦布告し（、義和団事件に発展し）た（4点）
- ④8カ国連合軍によって鎮圧された（4点）
- ⑤北京議定書で外国軍隊の北京駐兵を認めた（6点）

(2) (10点)

- ①日清戦争後の三国干渉の見返りにロシアが敷設権を獲得した（6点）
- ②ロシアが旅順・大連を租借し、そこに支線を建設した（4点）

(3) (15点)

- ①史料が二十一カ条要求であることの判定（3点）
- ②中国はパリ講和会議で撤回を主張するも退けられる（3点）
- ③反日感情の高まり、五・四運動へ発展（4点）
- ④二十一カ条要求後日米の対立が顕在化（2点）
- ⑤ワシントン会議の結果、二十一カ条要求が破棄され、一応の妥結を見る（3点）



会員番号

氏 名